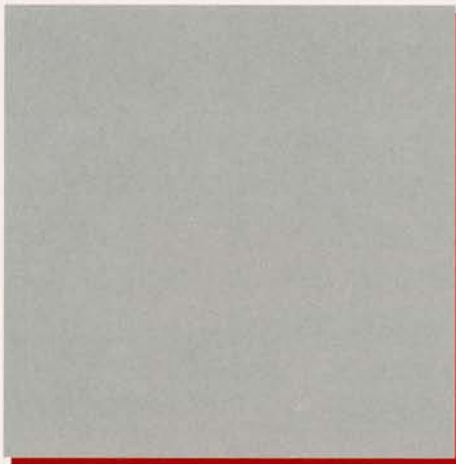


祝祭



地域研究コンソーシアムの発足を機にこのニュースレターを発刊することになった。コンソーシアムは大学や研究機関が地域研究のネットワーク化をめざして集う新たな場である。そのような場は祝祭的な時間空間でもある。祝祭とは日常性から離脱するプロセスだと考えると、コンソーシアムは大学や研究機関が日常的にルーティーンとして臨地研究を含めて個別に行ってきた地域研究を新たな研究プロジェクトの旗のもとに組織レベルで結集して既存の枠組みを超えて推進する祝祭的な空間になることが期待される。

もちろん、コンソーシアムでの研究成果はそれぞれの日常的な研究の場である個別の大学や研究機関にフィードバックされて再統合されることになる。つまり、地域研究の日常性と非日常性の往還の運動を与えてくれる場としての機能がコンソーシアムの醍醐味なのかもしれない。ニュースレターの発刊に当たり、祝祭的な空間の立ち上げという象徴的な意味を込めて世界の各地の人々の祝祭の写真を組み合わせて表紙をデザインしてみたが、同時にコンソーシアム設立を祝い喜ぶという率直な祝賀の気持ちをも表している。今後も特定のテーマごとに世界各地の地域の違いと類似性を視覚に訴える写真などで表紙をつくっていきたい。
(文・臼杵陽)

地域研究 コンソーシアム ニュース No.00

Japan Consortium for Area Studies

発行日 2004年10月15日 発行 地域研究コンソーシアム

●CONTENTS

- ◆コンソーシアム発足にあたって 地域研究の新たな空間へ……家田修
- ◆設立集会開催報告……河野泰之
- ◆コンソーシアム設立までの歩み……押川文子
- ◆加盟組織からのメッセージ……青木克己/石川捷治/市川光雄/田中明彦/中村安秀/山内信幸/山田勝芳
- ◆地域研究者の視座 私にとっての地域研究……加藤博/木畑洋一/村井吉敬
- ◆エッセイ フィールドと出会いと ボルネオの首飾り……山本博之



地域を愛し 地域の生きざまを 語り合える コンソーシアムに

村井吉敬

インドネシア最東

端パプアにいる。パ

プアを初めて訪れてから10年以上になる。だんだん強い愛着が出てくる。

もともと、「わたしのインドネシア」は西ジャワから始まった。町の物売りや稲作農村が関心の対象だった。しかし、エビの調査を始めて海辺を歩くようになった。スラウェシ島、マルク諸島など、エビを獲っている漁民たちの姿を追うようになった。海と島と森とともに生きる人びと、社会、それを取り巻く自然をくまなく知りたくなった。地域はだんだん東に移り、とうとうパプアにまで来てしまった。



森と海を暮らしの糧に生きるタナメラ湾の集落。天然資源の自主管理制度であるティアイティキは、彼らの暮らしから生まれた知恵である

パプア州最東北端ジャヤブラ（州都）からクルマで2時間、タナメラ湾がある。群青の海、浅瀬はエメラルドの珊瑚の海、そして白砂の浜、濃い緑の森と山々、人びとは森と海を暮らしの糧に生きている。背後に迫る森と山、海辺に集落がある。

マルク諸島でサシと呼ばれる一定期間の禁漁制度をここではティアイティキと呼ぶ。禁漁を司る慣習法長をオンドワフィと呼んでいる。今回、ある集落を訪れたら、ティアイティキを開始するという。わたしに、その標識になる木を海に差すという役割が回ってきた。カソワリ（木麻黄）の木を禁漁にする海に差し込むのである。ティアイティキを観察できる「絶好の機会」と喜んだが、木を差した者が来ないと禁漁を開けられないと言われた。来年もこざるを得ないかもしれない。

別のある集落、ここにはもう10回以上も来ているだろうか。マラリアに罹ったのもこの集落だ。最近まで村長だったPさん、日本にもパプアの資源管理のシンポジウムに招待した人物である。マンゴウの季節だということで出かけたら、もうマンゴウはほとんど残っていなかった。いつもサゴヤシ澱粉でつくられる主食バペダをご馳走になる。

別天地のような所だが、この地もパプア独立運動の波をもろに受け、政治的に緊張している。「わたしのインドネシア」から「わたしのパプア」と言わざるを得ないような時の流れと意識の流れがある。地域は国家ではない、海洋東南アジアを歩いているとそんなことを考えざるを得ない。

地域研究コンソーシアムは地域を愛し、地域の人びとの細かな生きざまを語り合える「場」であってほしいと願っている。

むらい・よしのり／上智大学アジア文化研究所教授、専門領域は東南アジア社会経済論、主な研究地域はインドネシア

も、私はあつかましくも「重層する地域・つながる地域：イギリスの場合」と題する発題を行った)、このニューズレターに寄稿されている他の方々のように、対象となる地域のどこかに密着し沈潜して研究するという経験を私はもっていない。地域研究者と名乗る資格を私は明らかに欠いている。

しかし、ここで開き直ってみることも必要かもしれない。イギリス帝国史を研究するという事は、地球上の陸地の四分の一を覆ったイギリス帝国のなかのさまざまな地域に視線を放たなければならないことを意味する。私が中国史研究者といっしょに共同研究をしたり、南アジアの研究グループに加わったり、オーストラリア研究に関わったりしてきたのは、自分としては自然な流れだった。他方では、そのようなかつてのイギリス帝国内の地域に注いだ視線をイギリス本国に戻してみることで、イギリスという国の姿がもつ襞を探ろうという努力もしてきた。本物の地域研究者からみれば、どこをとってもごく表層しかひっか

いていないということになるのかもしれないものの、これはこれでいいのではないかというのが、私の開き直りの姿勢である。

最近、私の職場でフランス研究に携わっている同僚たちが、『フランスとその〈外部〉』（東京大学出版会）という本を出した。この本について編者の一人石井洋二郎氏が雑誌『UP』（2004年8月号）に寄せた文章の中で巧みな紹介を行い、地域文化研究者は、絶えず混淆し交錯する「内部」と「外部」が織りなす力学に身をさらすことを厭わぬ姿勢をもつべきであると、論じている。まさに至言であるが、帝国史を研究するという事は、そのような身構えを常にしていなければならないことを意味する。こう開き直りつつ、本物の地域研究者の方々の驥尾に付していきたいと思っている。

きばた・よういち／東京大学大学院総合文化研究科教授、専門領域は国際関係史、主な研究地域はイギリス

私にとっての地域研究

世界の各地の文化が多様であるように、JCASに集う研究者の研究手法、対象地域へのアプローチの仕方も多様です。「地域研究者の視座」では、研究者の方がたに、自らの研究方法や対象地域への思いについて寄稿いただき、地域研究とはなにか、その楽しみはどこにあるのか、コンソーシアムはどうあるべきかを考えてゆきます。

地域研究の 楽しみ

加藤 博

社会科学の歴史は、
ひとつのディレンマ

をいかに克服するかという歴史であったといつてよい。それは、個・部分のレベルで合理的なことが必ずしも集団・全体のレベルで合理的ではなく、逆もまたそうであるというディレンマである。

なぜそうなのかというと、社会科学が、自然科学と異なり、心をもった人間を扱うからである。知の巨人、マックス・ウェバーが果敢に挑んだのはこのディレンマであった。かくて、彼は社会科学の研究では、客観的・外在的な解釈のほか、主観的・内在的な理解の手続きが必要であると主張した。平たく言えば、人間の行動を理解するためには、彼あるいは彼女の行動の動機を知らねばならないということである。

しかし、言うは易し、行いは難しである。これまでこのディレンマは解決されていないし、おそらくこれからも人間がロボットにならない限り、完全には解決しないであろう。社会科学者ができることといえば、個・部分のレベルでの研究と集団・全体のレベルでの研究との間を行き来し、このふたつに橋をかける作業を不断に繰り返すことである。

ところで、この作業を行うにあたっては、集団・全体レベルの問題を個・部分レベルで明らかにしようとするスタ

ンスと、逆に、個・部分レベルの問題を集団・全体レベルで明らかにしようとするスタンスがありうるであろう。研究者によって地域研究をどう考えるかは異なるが、少なくとも私の場合、地域研究とは、歴史研究と同様に、前者の集団・全体レベルの問題を個・部分レベルで明らかにしようとするスタンスをとる学問である。

そして、そこで楽しみは、後者の個・部分レベルの問題を集団・全体レベルで明らかにしようとするスタンスをとる学問での楽しみが個・部分と集団・全体とをひとつのモデルによって結びつけることにあるのに対して、個・部分のなかに集団・全体を見通すビジョンを獲得することである。そして、それが可能となった瞬間は、まさにふたつのレベルのイメージがスパークした瞬間である。

私は、エジプト社会研究のなかで、こうしたスパークを幾度となく経験した。たとえば、薄暗い文書館で偶然知った150年も前の小さな村での権力闘争とか遊牧民の反乱についてのこまごまとした事実のなかにエジプト、さらには世界における「近代性」を感じ取ったときなどである。このような経験のなかで、個・部分と集団・全体とをつなぐのは抽象的なモデルではなく、150年前の村長Aや遊牧民の首長Bとの文書や聞き取りを介した「会話」である。

かとう・ひろし／一橋大学大学院経済学研究科教授。主な専門領域はアラブ社会経済史、主な研究地域はエジプト

帝国研究と 地域研究

木畑洋一

「あなたの専門は何
ですか」と聞かれた

とき、私は、国際関係史、イギリス現代史、イギリス帝国史などと、その場にに応じていろいろと答えている。「イギリスの地域研究を専門にしています」と答えることはまずないといつてよい。とはいえ、私はイギリスの地域研究を行う課程を卒業し、今はそこで教えているし、自分が研究していることが、地域研究としてどういう意味をもつのかということは、否応なく折に触れて考える課題となっている。

ただ、今改めて考えてみると、地域研究なるもののあり方について発言することがあっても(2004年1月に地域研究コンソーシアム設立準備ワークショップが開かれた時に



エジプト・ソハグ県アウラード・シェイフ村の子どもたち。現在、エジプトの村落は急速な勢いでその景観を変えつつある。そのなかにあっても、子どもたちの屈託のない笑顔は変わらない

したい。セミナーやシンポジウムは、開催するだけで疲労困憊してしまつては、研究の実質は進まない。ネットワークを通じて、事業実施などのノウハウも流通させることによって、研究者の実質的研究が進むような形になればいいと思う。

NGOと地域研究者

中村 安秀

ジャパン・プラットフォーム評議員/大阪大学大学院人間科学研究科



難民の発生や地震災害などの緊急人道支援では、NGOは一刻も早く被災地に入ることを要求される。現地に関する多角的な情報を収集している時間的余裕はない。緊急期を過ぎ、復興や開発を考慮しつつ活動する段階になると、活動地域の文化や社会に関する深い理解が求められる。多くの経験や知識を持つ地域研究者から、NGO活動という「地域に関する実践」への知的支援があれば、地元の人々に真に還元できる活動プログラムを立案し実施できるのではないだろうか？

また、国際協力NGOによる長期間の草の根活動では、活動のなかでNGOが多くの貴重な知見を蓄積している場合も少なくない。それらの成果や知識をNGO団体の内部に留めることなく、地域研究の発展、ひいては日本社会に還元することも重要なNGOの役割ではないだろうか？

NGOと地域研究者。一見、大きな距離があると思える両者が協働作業を行える環境さえ整えば、必ず新しいものが生まれるはずだと大きな期待をしている。

広報機能、リエゾン部門の充実を

山内 信幸

同志社大学アメリカ研究所



このたびは、貴「地域研究コンソーシアム」に本学アメリカ研究所をお誘いいただき、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

本研究所は、「アメリカに発達した学術・文化・芸術など、文化一般の研究および普及」を目的に設置され、アメリカ研究では国内外で一定の実績と評価を有する組織として位置づけられてまいりました。しかしながら、立ち上げ当初のメンバーは世代交代し、第2・第3世代へと受け継がれていくなかで、学内の豊富な人材とは別に、新規メンバー開拓のための学内ネットワーク作りの喫緊性、研究領域の細分化とともに、「アメリカ研究」という1つの枠組みで包含することの是非など、いくつかの課題もございます。そこで、今般の「地域研究コンソーシアム」設立に際し、いくつかの提案を述べさせ

ていただきます。

まず、組織としてのスケールメリットを最大限に訴えるべく、研究上の利点を末端の研究組織あるいは個人にどのように浸透させるかという問題があるかと思えます。当分の間は、研究上の伝統・実績を有する研究組織が中心となって「地域研究コンソーシアム」を運営していかねばなりません。設立当初から「セカンドステージ」を見据えた方向性を常に意識しながら、大学院生（博士課程前期）を含めた研究者のすそ野の開拓を目指した広報活動に力点を置く必要があるかと思えます。

また、コンソーシアムならではの機能として今後必要とされる、外部組織との連携のための窓口機能、とりわけ、外部資金獲得のための受入・調整機能として、「リエゾン部門」を早急に設置し、社会に開かれた組織作りを目指すことも求められるでしょう。

最後になりましたが、立ち上げ時のご苦勞・ご尽力に敬意を表しつつ、今後、さらなる発展が期待される「地域研究コンソーシアム」の船出を心よりお祝い申し上げます。

地域研究の稀有な「場」

山田 勝芳

東北大学東北アジア研究センター



2004年4月、法人化により国立大学は各々が一つの法人となった。これによって教育研究体制の大転換がもたらされ、教員の意識改革も進んできている。国立大学法人はそれぞれの基盤を固めつつ、個性・独自性を発揮して、よりよい学生を受け入れ、優れた研究者を招聘することで、この競争時代を生き残ろうとしている。旧来の国立・公立・私立という住み分けから大競争時代に入ったのである。また、世界的にも各地域でボーダーレス化と個性化のせめぎ合いが続いている。

このようなときに、我が国の地域研究諸機関や研究組織・学会が集結したことの意義は極めて大きい。研究者コミュニティとしての親睦だけではなく、参加各組織は互いに切磋琢磨して、個性化を図り、この競争的環境の中で学術発展と社会貢献を進めてほしい。そして、貴重な情報が行き交い、公平な競争がなされる地域研究の「場」として機能していくことを願っている。

各方面の期待は大きいし、それに応える責務も大きい。参加一機関として改めて襟を正しているところである。

コンソーシアムが拓くゆたかな可能性

地域研究コンソーシアムには、研究組織、教育組織、NGO、NPO、学会など、世界の諸地域に関心をもつ多様な組織が加盟しています。コンソーシアムの発足にあたって、加盟組織の代表者から、それぞれの期待を寄せていただきました。

熱帯医学研究の飛躍的發展に期待

青木 克己

長崎大学熱帯医学研究所



熱帯病は疾病を媒介する動物、例えばマラリアを媒介する蚊や住血吸虫を媒介する貝の生息に適した風土と貧困、劣悪な生活環境、病気への無関心など社会的・経済的負の要因が共存する地域に流行する。そこで熱帯医学の研究は分野横断的・学際的研究あるいは地域研究の一環として行われるべきといわれてきた。しかし実際には熱帯医学研究の大部分は専ら医学的思考と手法のみによって行われている。

地域研究コンソーシアムの設立は、熱帯医学研究者に種々の専門を異にする研究者との情報交換、共同研究の機会を与えてくれる。近い将来、地域研究コンソーシアムを基に推進される分野横断的・学際的研究により、熱帯医学は飛躍的に進展し、これまで類例のない独創性のある研究成果がもたらされることが期待される。

コンソーシアムらしい組織論での活動を

石川 捷治

九州大学韓国研究センター



日本での「冬ソナ」ブームに象徴されるように最近の日韓関係は予想外に良好である。このブームが一過性に終わらず、これをバネに戦後ヨーロッパの独仏関係のような日韓関係が創られていくことを念じたい。

日本におけるコリアン・スタディーズは単なる外国研究ではなく、日本の過去・現在・未来に深く関わるものである。韓国・朝鮮はいわば自己を映す鏡であった。特に日韓は、いまや一つの「共同生活圏」ともなりつつある。このようなコリアン・スタディーズも他地域との比較などによりさらに魂のこもったものとなろう。

そのような意味で、コンソーシアムが多数の参加でもって出発したことは喜ばしい限りである。だが、大きな組織は逆に互いの意思が通じない危険性も孕んでいる。地域が、そこに暮らす人々の生活そのものを反映し重層的であるように、コンソーシアムもその活動内容によって各研究組織が柔軟に相互連携することが可能となるような工夫が必要となろう。そして、コンソーシアムの意義が世界において認められるような組織論の誕生が期待される。

スーパー大学院的な役割を

市川 光雄

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



かくも多くの機関・組織が地域研究コンソーシアムに参加したのは、「地域研究」に対する期待の大きさに加えて、これに参加しないと「バスに乗り遅れる」と感じたからでもあろう。それだけの吸引力が発揮できたのは、ひとえに「地域研」をはじめとする幹事組織のご尽力に負うところが大きい。しかし、このバスが本当に乗るに値するものかどうかは、今後の活動にかかっていると思う。

「コンソーシアム」の活力を維持するためには、頂点の高さと裾野の広さの両方を維持する必要がある。教育は一般に真中より下部を強化するものと解釈されがちだが、かならずしもそうではない。大学院生を「研究者」として位置づけ、その研究能力の強化を教育の柱におくところでは、第一線の研究と教育は不可分の関係にあるからである。

したがって私は、コンソーシアムが、単なる大学院教育を越えたスーパー大学院的な役割を果たすことを期待したい。単位互換とか、学部・大学院教育のカリキュラムなど、通常の学部・大学院教育に関することなどだけでなく、むしろそれらを越えたもの、たとえば、ふつうの大学では困難な、大学院生・若手研究者の海外調査・派遣や臨地教育の支援などを是非とも考えていただきたい。

したがって私は、コンソーシアムが、単なる大学院教育を越えたスーパー大学院的な役割を果たすことを期待したい。単位互換とか、学部・大学院教育のカリキュラムなど、通常の学部・大学院教育に関することなどだけでなく、むしろそれらを越えたもの、たとえば、ふつうの大学では困難な、大学院生・若手研究者の海外調査・派遣や臨地教育の支援などを是非とも考えていただきたい。

実質的研究の進展に期待する

田中 明彦

東京大学東洋文化研究所



地域研究コンソーシアムが、本年春に発足したことによって、日本における地域研究のネットワークがいよいよ本格的に成立したということである。とうの昔に出来ていなければならなかった仕組みが、ようやく出来たかという感慨もあるが、現在の環境にして、はじめてネットワーク型の仕組みとしてのコンソーシアムが成立したという面もあると思う。インターネットが普及する以前であれば、なかなかネットワーク型の仕組みで全国的で世界に開かれた地域研究促進の仕組みは作れなかったように思う。ハードな大組織によって地域研究を促進するというよりも、コンソーシアム加盟組織の柔軟な連携によって、実質的な研究が促進されることを期待

地域研究コンソーシアムが正式発足

そのためには、参加組織のみなさんからのインプットが必須です。実際に研究や教育に携わっている場で、そして実務的な活動に携わっている場で、コンソーシアムとしてこのようなことをやってみてはどうか、こういう場を作ってみてはどうかなど、いろいろなアイデアがあるはずです。そういうアイデアをどしどし出してください。そういうアイデアを汲みあげながら、地域研究コンソーシアムをより機動的、効率的で、実りのあるものにしていきたいと思ひます。



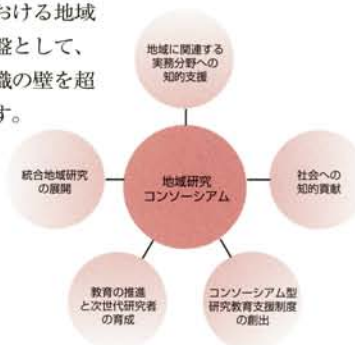
2004年4月26日、KKRホテル東京で開催



発足当初に推進する活動

地域研究コンソーシアムは、グローバル化が進行し、地球的規模の課題が山積する現在において、地域研究に求められる学術的・社会的役割をはたすべく誕生しました。日本における地域研究の新たな推進基盤として、従来の地域区分や組織の壁を超えた研究を推進します。

当面は右図の五つを重点的な活動分野としますが、組織の充実や研究ノウハウの蓄積によって、柔軟にその活動分野を拡げてゆきます。



加盟組織

コンソーシアムは、地域研究に関わる研究組織（大学附置研究所、大学共同利用機関など）、教育組織（大学院研究科、研究科専攻、学部など）、NGO、NPO、学会などを参加単位にしています。今後もさらに加盟組織を募り、その機能の充実を図ります。

加盟組織の構成

- 大学附置研究所／センター……29
- 大学共同利用機関……1
- その他研究機関……2
- 21世紀COEプログラム……7
- 大学研究科／研究科専攻／学部……8
- NGO、NPO……2
- 学会……7

計56組織

2004年9月末現在

きもあり、この頃から北海道大学スラブ研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、京都大学東南アジア研究センター（当時）、地域研などのいくつかの機関長や研究科長を中心に、「コンソーシアム構想」実現のための会合を重ねられるようになった。

多様な分野と地域を対象とし、それぞれ独自の設置形態をもつ研究・教育組織の連携は、理念として語ることは容易だが、いざ実体化しようとする多くの課題が立ちだかる。にもかかわらず、何度も困難な時期を経験しながらもこの話し合いは継続し、次第に実質的で実現可能な「コンソーシアム」のありかたが共有され、2003年5月には、上記4機関に加えて東北大学東北アジア研究センターと東京大学東洋文化研究所を加えた6機関長の連名による「『地域研究コンソーシアム』設立に向けての共同提案」がまとめられた。

その後、中堅若手研究者を含めてコンソ

ーシアム構想具体化のためのワーキング・グループが結成され、コンソーシアムを単なる機関連絡会ではなく、「地域研究」における基本、たとえば地域概念や方法を問い直す場とすること、柔軟で開放的な協議体であるとともに実質的な活動を推進するものであることといった、今日の地域研究コンソーシアムの基本的性格が確認されてきた。前者の問題意識は、2004年1月の設立準備ワークショップ「地域研究を？（クエスチョン）する」に結実し、後者は運営委員会を設置し複数の拠点組織が活動を分掌する形態として具体化した。

今日の学術をめぐる諸制度のなかでは、当初理想とされたリサーチ・カウンスル型のコンソーシアムを直ちに実現することには多くの困難がある。そのなかで地域研究コンソーシアムは、研究・教育・社会活動の現場にある諸組織が、今という時点で可能な最善の形態を模索し共同構築してきたという点において、かつてない試みであ

り、今後につながる可能性をもっている。

この設立準備ワークショップの会場で発足した設立準備委員会には、それまで準備・参画してきた国立大学附置研究所・センターに加えて、私立大学を含む大学院研究科、COEプロジェクト、NGOなど市民組織も加わり、発足に必要な規約や活動計画などを検討し、活動計画案、規約案、組織案をまとめ、3月中旬から設立時加盟組織の申請受付を開始した。その結果、46組織（9月末現在56組織）という予想を上回る組織加盟を得て、4月26日に東京で第1回理事会および設立集会を開催し正式発足した。

コンソーシアムが多くの組織と人々の協力の果実であることを、設立に関わった者として、感謝とともに記しておきたい。

押川文子 地域研究コンソーシアム理事／
地域研究企画交流センター

地域研究の 新たな空間へ

地域研究コンソーシアムはアカデミック・コミュニティに立脚する新しい型の組織連携です。参加しているのは地域研究を推進する研究組織が主ですが、次の世代の地域研究者を育成する教育組織、そして地域研究の成果を実社会で活用する民間組織もまた重要な構成員です。つまり研究所、研究センター、研究科から、世界の諸地域の現場で活動するNGOに至るまで、多種多様な組織が大学等の枠組みを超えて集まっているところに、このコンソーシアムの新しさがあります。また地域研究コンソーシアムは開かれた活動体であり、新たな加盟はいつでも歓迎されます。

研究対象との絶えざる対話、地域と地域研究者との双方向の対話が地域研究の基礎です。本コンソーシアムにおいても研究、次世代養成、社会連携が組織の枠組みを越え、しかも相互的、双方向的に連動することで、参加組織のそれぞれが有している知や資源が幾重にも生かされ、さらにはそれが新たな知や活力として参加組織に戻ってくることが目指されています。

こうした知と活力のネットワークを機動的に後押しし、連携活動を活性化させる仕組みとして、地域研究コンソーシアムには拠点組織が置かれています。現在、本コンソーシアムの設立に中心にかかわった四つの全国共同利用型国際研究拠点、すなわち地域研究企画交流センター、京都大学東南アジア研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、そして北海道大学スラブ研究センターがこの役割を担っています。中でも、人間文化研究機構内に大学を超えた地域研究を推進するために設置された地域研究企画交流センターには、核となる機能を果たすべく、コンソーシアムの事務局が置かれています。

開かれたネットワーク、双方向的な知と資源の活用、拠点組織の機動性によって、地域研究コンソーシアムはこれまで実現困難だった地域研究にかかわる研究、次世代育成、社会連携の新たな空間を生み出す媒体になることができると考えます。

皆さん、地域研究の新たな空間づくりに参加しませんか。



地域研究コンソーシアム会長
北海道大学スラブ研究センター

家田 修

機動的、効率的な 組織をめざして

地域研究コンソーシアム運営委員長／京都大学東南アジア研究所
河野 泰之

さる2004年4月26日、KKRホテル東京において、地域研究コンソーシアム設立集会が開催されました。

当日は、地域研究に関心をもつ大学附置研究所や研究センター、大学共同利用機関、大学院研究科や学部、21世紀COE拠点形成プロジェクト、NGOや学会など、全国の40余の組織から90人を超える方々にご出席いただきました。

設立準備委員会からの経過報告に続いて、理事会と運営体制、規約、活動計画が紹介された後、すでに地域研究コンソーシアムに加盟した組織の参加者がそれぞれの組織の活動やコンソーシアムへの期待を報告しました。

最後に、当日の理事会で選出された家田修会長が地域研究コンソーシアムの設立を高らかに宣言して、閉会しました。

会長の設立宣言にもあったように、地域研究コンソーシアムは双方向の知の連携をめざしています。研究分野や研究対象地域を超えた連携のみならず、研究者コミュニティと実務組織や社会との連携を推進するインターフェイスとして成長していきたいと思います。

コンソーシアム設立までの歩み

地域研究の推進のためのネットワークを、という発想は、1970年代から日本の地域研究者の間で着実に育まれてきた。日本学術会議をはじめとする学術団体や諸委員会でも、80年代から90年代にかけて様々な提言がまとめられている。とりわけ1990年代半ば以降、グローバル化の進展や冷戦終焉後の国家再編過程のなかで、あらためて地域を結び分野研究をつなぐ研究や教育のシステム構築と社会連携強化の必要性が認識されるようになった。こうした機運を受けて国立民族学博物館地域研究企画交流センター（以下、地域研と略す）に設置された「地域研究の総合的推進方策／体制に関する調査研究委員会」が、これからの望ましい地域研究推進システムとしてネットワーク構築を提唱する報告書をまとめたのが2002年3月。国立大学法人化の動



墓参りをしているパパ（中央）とその兄弟。断食月が明けた翌日の午前中、村の共同墓地に集まる。草取りなどをして墓を清め、墓のまわりに座ってクルアーン（コーラン）を読む

ボルネオ島北端に位置するサバで、A. アフマド家での私の居候生活は3年間続いた。私がパパ（お父さん）と呼んでいたA. アフマド氏はサバ生まれのムスリム（イスラム教徒）で、数年前に役所を定年退職してからますます敬虔になったとの評判だ。1日5回の礼拝はもちろんのこと、常にムスリムとして自らを厳しく律し、ムスリムとしての勤めを守らない他人に対しても厳しい。

そんなパパの家で過ごした3年間のうち、私がムスリムでないという理由で特別扱いを受けたことはたったの1度しかなかった。

パパの田舎で小学校の先生をしていた長男のカイロルが急死したときのことだ。30歳を目前に、結婚して男の子が生まれた直後だった。パパの「息子」である私も葬儀に参加したが、埋葬から7日目の共食で出されるヤギ肉料理には特別な意味があるため、非ムスリムには食べさせない決まりらしい。私はさほど気にしていなかったが、車座で食事するのに1人だけ同じものを与えられないことに、パパたちはかなり居心地を悪くしていた。

そこでママ（お母さん）が考え出したのは、牛肉にタコ糸を通して数珠繋ぎにして、両端を結んで首飾り状にしたものを件のヤギ肉と一緒に料理することだった。料理が済んだところで鍋から首飾りだけ掬い上げれば、見た目も味付けも同じものを食べながら、私だけヤギ肉を食べずに済むというわけだ。

よくもこんなことを考え付くものだと感じしていると、食べる段になってパパが私の隣に来て座り、牛肉を食べ始めた。パパは最後までヤギ肉を口にしなかった。カイロルを失って目に見えて気落ちして

ボルネオの首飾り 山本 博之

いたパパにかける言葉が見つからず、なぜヤギ肉を食べないのかはついに聞けずじまいだった。それでも、私の隣に座り、牛肉しか食べないパパの態度から、「おまえ1人を仲間はずれにはしないから」という思いが強く伝わってきた。

40年前、サバはマラヤと連邦してマレーシアの一州となった。中国系やインド系の「大文明」を内に抱える多民族社会マラヤでは、マレー人ムスリムが他民族に見下されないように精いっぱい努力してきた。「大文明」にはイスラム文明で対抗し、他方で「文明化」の対象とみなす先住民にはイスラム化を迫り、あるいは「正しい」ムスリムになるよう教え導いてきた。イスラム教の至高性を疑わず、他宗教・他民族に決して譲歩しない態度や心性を身につけたマレー人は、今度はサバのムスリムの「文明化」に乗り出している。

7日目の共食の前の晩、パパや村人たちは、決して仲間はずれにするつもりはないんだ、でも決まり

だから守らないわけにはいかないんだ、と申し訳なさそうに何度も説明してくれた。よきムスリムとして生きることと同じように異教徒や異民族との関係維持にも心を砕くサバのムスリムたちに、マラヤ発の「文明化」はまだ及んでいない。

やまもと・ひろゆき/地域研究企画交流センター助教授、専門領域はイスラム圏東南アジア現代史、主な研究地域はマレーシア



ブルネイ料理のサゴを準備しているママ。サゴはサゴヤシの樹の髄を煮て糊状にしたもの。熱くて軟らかいうちに竹製のV字型の箸で絡め取り、口に入れて噛まずに飲み込む

ウズベキスタン 春の訪れを祝う 祭り ナビ・ ウタルベコフ	中国 土族の祭り 庄司博史	中国 チベット族の 祭り 庄司博史
マレーシア サバのブルネイ 人の婚礼儀式 山本博之	エストニア 民族歌謡祭 庄司博史	表紙写真
フィンランド の民族祭 庄司博史		

■編集後記 「地域研究コンソーシアム・ニュース」創刊号(00号)をお送りします。このニュースは、コンソーシアムの「出版・広報部会」が編集し事務局が発行しています。ニュースでは、コンソーシアムの活動をお知らせするとともに、地域研究に関するフォーラム誌となることをめざして誌面の充実をめぐる所存です。速報情報を掲載するコンソーシアムのホームページ(<http://www.jcas.jp/>)とともに、今後ともどうぞご愛読いただきますようお願い申し上げます。 出版・広報部会